暁臺七部集

上

へ 5
1978
1

へ　5

墾芸集　[illegible]　幣袋
佐渡日記　志をり萩
秋の日　[illegible]

曉臺 俳諧七部集 全

東都書肆 青雲堂英文藏

世に俳諧の七部集とて世にもてはやし
芭蕉翁をはじめ先哲の名あらはるゝ
より伝はるもの暮雨巷暁臺叟よりあらん
七部の名の無きことを惜しみなからも
なくさめぬことなし果園のあるしより
猶此の階に登りて此叟の園に桂
歴のことあらんと語り合ふこと二十年来

志くひくりしむかしまを思ひ出して
狂言よしをあけくよつけいさや
葉しくのちりもうせぬうちにと
ともしく七部をとり集て世に廣むる
るものは末思なる

文政九丙戌

暮雨巷
帯梅

久村暁臺翁ハ正風復古に
志篤く世に聲おをはくひ人く
ふるまひみちて炭俵猿蓑の
句ぶりよりも見龍が蕉翁の言を
ふしおひて今俚俗のよの雨とふ
落りけるを一時正脈を開き
調を引きんたるはたぐひなく

万葉めきたるに古今集めかしくし
意なく蕉翁の名の日に三歌仙
をこひ秘か日に琢磨の功ハ如此
はましいらそ海内ふるひ正風ハ
ひらけれ実よ復古せり一新
人ともいふ也し在世の集物
なかまくのせりに古郡を撰て

夜の浦の常梅翁追の交をつゞきしと
友人庭雅よくあそびしろ
果まれ世をさりゆきし唯よ
稀られあれハ常梅の跡ほしきと
つきての秘暁臺翁の使をて
挙て世事加へたるをいやや
庭雅のりしふたゝせてそのゆるしを

あらしの頃に秀葉を
ましら錦ける

文政己丑秋

梅間山農

序　　支朗

一字ありて七情を包し宮有
川羽を剖て幽深玄妙を以すぶ
そのを縄の町しゆり是を見てとく
俳諧の原有推しまたの蹟の山有
紅まひとのふをとて三経す万象の
本情有推と頃説阿ま字有濯紀

蹈葉に句数わたりて一集を撰ふ
頃しハ蕾両巻の枝葉や仍て冊
に名付けん事を思ふに今宵も
仲秋堂の月蹈葉の水楼にあそひし
ありし夜ハ欄によりて江上の清光を
賞ひ池の日本池の眉を観念すハ此も
あらぬとも言口に思ひ出したまふ

暁かなしひことや暁ほて
暮へまて横ふしてみなはとして
ゆくふハ後集ハ枇杷園にゆつりて
甲に似せて字治をとらむ横の並
の撰者たらんと先ん志を揃
しゝ号を序とし侍る
于時明和六己丑二月望

竪並集巻之一　　都貢撰

冬之部

除夜

手折〳〵とおもふてきてぬ宿の梅　　暁臺

筆あそんと千金ハ風景文
のこし残めける

年百おはりしと行へ歩さる　　事紅

羽織着てる追ふとしの貢小　　白圖

時局附記

さ身を切ほとの寒れ啼うにふる　　支朗

さらるや古新くしき麦の雎　　都貢

下馬先や忘らるゝ中秋きりきりす　曉臺
盃色の滴落なりわくらはに　斗拙
ちらりゝと夢見けりつるや帰花　竹也
宗之桂の葉にて枝ほそく葉しれり　東壺
地上尺にそふきうゝ絲なり鵯　白圖
芦垣や茶の香の夕かな　都貢
あはむしや秋の夜寒の海の面　曆三
ひろく羽さ西夜の星残る　秋千
蜻蛉や目結の叢ありと飛ぶ　曉臺
西一日静まよしの浪ここの牀　丈州
霄のゝる下羽織わすれて冬の雨　夕當 熊一

冬籠の野中にまじて冬の菊　支朗
赤らしきやうんと行主の力足　菊居
赤かりし片吹そし焼きぬ妙の琴　万倣
あらし吹や教風景の山ひと川　寧紅
赤かりし茶も豆の葉茶に人杖ひし　曉碁
風や冬の浮葉をし取くり　侍充
渺々と海みとし雲残れく夜の　寸馬
梁の冬瓜残れるに雲香かな　輪五
鶺鴒の渺々へ志さるや雲ちーら　負 信夫 蘭雅
懐の志蝿まで雪残る垂やらん　羅城
わくしくや夜の冬ふくろさと閏におに　残長

忍ふ恋

剃刀は何ちる新山の志きを松かな　支朗

海を又多見に出して並の桑　白圖

待恋

人知らぬ松の鏡に影見えし　居係 入素

ましら人の糸綾書くも穀火鉢に　奥福島 夕芝

何かつきや未来紙になる雲の外と　都貢

雲路よりこまで二日を月夜に　卧央

雲の売なくてまた雨や松の雲　曉臺

今朝の雪外国の葉にかくる　琴五

山島の霧より霧や何も松の雪　素紅

一すちに魚の網やすまれの雲　矢作 千久婦

雪中枇杷園小集席上句合

左

きれふとし寒さに帰らも雪の森　曉臺

右

大つやすゝひ出る雪の森　都貢

左

氷よりとし雪残多又新竹の編　支朗

右

蕗の作やさとめつる鳥の声　白圖

三尺の雪すれ上や冬の月　半紅

新さえて月にも忘む月の光かな　風荷

ふるさとの物語しる夜の月　寸紅

朧残りて灯や続子にかゝる哉　暁臺

生花の滴にぬれて紙衣かな　寸馬

鮓ぬしきや瀞筝に元の聲り　一桑

神祇之部

山風やつゝみ探んて神の幣　都貢

笠経の扉も合ぬふくさかな　斗拙

名どりや何までに築える川社　輪五

木草

冬ちまや日なく落き楷の色　琴宇

梅さくら新ハ柳もさまたりかり　駟六

枯芦によるゝ音あるさみだれ哉　松左

風なかし藤葉は梅を枝の音　奥福島 舞古

枯まこし節ゆや船のたゆり氷　寸馬

釈教之部

春もちる只活ふよかせよ鉢叩　白圖

雲なよ白き峯懸あらぬ鉢たゝき　輪五

霞れ日残りて織る程我夕東　万试

藪寺に定く銘香の妻かな　寸馬

古寺や落葉に汚る鐘の音　帆路

世のちりを我掃くや雲の行かな　菊居

手寄目の末程ゑらし芬りの坊　白圖

冬之雜

何と歩かう物なつかしや冬の山　万岱

炷入鴨の圍炉裏に並ぶ寒哉　白圖

擣りけり我鉄面冬むし蹕の星　帆路

太根川明日暮ゆ鉄竹薪に　桂五

香の毛鉄むきかり上がるさむさ　輪五

足袋の... あかつきに明ひむさ哉　支朗

夕川やうとうぬ粉をと冬寒し　曉臺

月さしそ汲人をおろん冬の隣　應三

山鳥とつ暮冬の衆しみ冬の嵐さ　菊居

壊炉に起ぐしもあり　曉臺

家々や柿兒のつきし田鶴の面　

坊主子に浮世をいろく師走かな　卧央

送磯教り

あら志山家のひらその実なり　一桑

墅華集巻之二

夏之部

夕立や横川の杉のゆるきより　車紅

白雨にぬれし男のきるひ哉　支朗

越中母寺蓮池

菫さへつゝく捨花流る水もと形し　亜満
菫のまれ傾りぬやうま咲まなり　東壺
手をとしと花あくさ菫の生ひ　卧央
雛妻あそ舟漕て菫の井　支朗
千歳松の残風のさゝきうしき　曉臺
やをく鉦すゞ紅粉摘いそく星の下　都貢
郭公す残あさきの水毛根より　殘長
果古鳥鳴く集む墨の松　丈州
菅刈の千鳥打よへく精まなる　白圖
出そこも鳴や同純同漲まるま水鶏鳴　亜満
千鳥啼くや芦岸の月の動きなり　越出雲崎 以南

千鳥鳴や鉦の外は松の際　斗拙
岩の水鶏みふしとや岩の松　都貢
さゝたまやきのふの小舟まる向ひ　芊紅
菴柏の芽まま根付やさつきかめ　矢作 朱荅
五月雨や一村たらぬ雲ちぎれ　都貢
夜あけふは照射やすゝん松の焦　支朗
ともし消く魂まてへ鼓明　斗拙
岡ともし照射の火屑ともあり　羅城
とゝ満るぬ人のこゝろや夕すゝみ　一葉
すゞしさや袂を落つく夕涼み　ジカサキ 帛莿
夕すゞみ男てつつの素寐り跡　磨三

切先を留主とぞ聞よ夕涼　雀蛾
月すゞし川岸に揚る藻の光　丈州
粟の花ちるや出水の濁りけり　以康
朝川や柄杓にかゝる粟の花　白圃
岩ぬらる水に影落く合歓の花　琴宇
毛虫や揉詩人の蕎麦のまゝ　支朗
夏草を芭蕉に活て咲にけり　矢作 蕉尾
名汲の坂に捨たりかさつきた　謝大
裏川へ船つなぎ込むや燕子花　等先
経よむも女のこゑやかきつばた　壷平
日傘なれ出なれ知らぬやけしの花　ヲカサキ 春媒

芦のとり揚らせて凋みけり　円 雪巣
柿崎や道ありさうなる絵文字　祖康
夏川や泡より捜す茱萸売　中垣川 雀志
山蜂のたゆまず綟たり紅粉の花　入素

神祇之部

天満宮やわするまてて白牡丹　暁臺
巫の肱の様清ところもかへ　白圃
禰宜守ふとき雪結の杜とや百日紅　長湊 六兎
祇園會にわすれものゝ落し扇　東壷

恋之部

須磨の女の雛宿せよ更衣　都貢

川すゞし濡衣に気ハたゝやすし　暁臺

わか庵ハ夏野も簾の庵かな　羅城

折りふし夜哉ひとつ飛ぶ蛍かな　東壺

根ハ見えて鳴く花なり松の蝉　大皃

おもしろき蝿もとまれば飛ぶ蛍　十年 阿玖

青き茂や椿来の実の竹の葉ゆれ　焦尾

莉藻流れむかしの声ハ何も交蛙　支朗

明寺に蚊の匂ひや蝉の声　狙乃

蛾が扇を振りて眠る寝息子哉　支朗

書きまねきまじ笑ふもあまたかな

なる人ハ毎のうつしかな

蚊屋ハ広く起ればせまし寝の衣　暁臺

小女遊びし奥州を嫌

哀なり青鬼灯のぬれしや　誰　白図

謙友人

備なり至る所にまた八重の花　麼三

旅行の終

嬉しげに蓑着て出る鵜舟夜かな　以南

簾もつて鵜にかしましく火影哉　東壺

山こえや簾の子漏れし鵜の簾　暁臺

何かの鵜の水ほそき姿哉　寸馬

芳埜蔡王堂にて

さゝなみや網の鳥居を峰伝ふ　万猷

一夢残ましく難波へ下る時

淀船や芦の上田に五月雨　都貢

洛東河原涼

すゞしさや人わしらでも流　以南

明かたや川原すゞみの残ひろひ　雪菓

江戸より下り

地を走る声とはきけし松魚売　暁臺

見晴亭滝

瀧のみちさまでもめぐる雲涼し　寸馬

夏之雑

暑き日や葦に入る川原鷺　謝大

岩端に巾流るゝ清水哉　以南

蚊遣火や岸に見えしに家もすゞ　李紅

篁影に裏手むきけし涼舟　窜馬

すゞしさや南海底に雲の糸　桂五

梅雨の日数に増や青かえる　万猷

目にさえぬ障子の里や白露　騏六

銀売の敷と墻根や花小ぶひ　子朱

人口直に涼むに茶漬の月　里中

夏の夜の面影もなく月の井　亜満

日盛やけしのかさなの花おとしき　白圖

暁華集巻之三

秋之部

乙鳥の日よりくもりし秋の雲　白圖

桐の葉たゞ風にしたがふも翁なり　一紫

鶏の羽うつくしくみるひと葉かな　士朗

新以の梓よちらくや朝顔なりし　千之重

夕顔の秋さりとかぬ蔓の動なり　矢作 麥園

秋立や一村むかしの施餓鬼棚　輪五

芝萩の矢指子さえずるくふの秋　暁臺

柳ちる夢や水絞なしかしけ烏丸　守東

星むかへ妙よ上座ゆづりけり　都貢

梶の葉や星よ手向の如何なれん　左丘

久堅もせきさやすゞん星に宵　寸馬

あさつきや新しかるまで初星　野虹

ふくらむと蕣のぬくる芭蕉哉　桂五

釈教之部　哀傷

灵棚やみな仏になり家ら見ろ新　峯紅

書起葉の志るしむすてそ灵祭　支朗

目出度さよ死し経帷の玉祭り　雪巣

関ひかぬ寺へ消行るよかなつ

佛いろもとりの大絵藍なりける

哉むかしく西圖に穿ちくして
今一小堂のミ名残りとしん
蟹飛ぶや阿弥陀の爪もちつき　白圖
多一菴の喪哉給ふ
身ひつに秋哉つゝめて泣日かな　仝
帆水の形に身ゆまかりしと告
こしたまふ
曲ふく人とをいふに花木槿　暁臺
秋の夜や蜂の巣葉に風の杉と　奥信夫 呑溟
雲に鶴羽根うちつれて秋日和　都貢
哉らむて佛に埋むや秋の水　斗晁

川風や芋にをよせん秋の声　支朗
名月や門松かりき蓍らん給　野虹
海の月鶴をわたらんハこゝ宵かな　支朗
月哉追ふとしめたる小舟の切乗　能州 康鳴
名月に露たさき美女の額か東　東壷
きのふの月船出ふしてる虫ん　左丘
打寄に萩垣かくし月られかな　暁臺
名月やかひやくの夢たちかね　都貢
海原に我ハ新ある月かれ川　卧央
十六夜や伴ひ聞ふるに月の窓　以南
盞の月の志てらさ砂夜川　事紅

蛩鳴に啼时声遠し　以南

むしの音や出つるを火伐焚客ては　斗拙

蛾や窓も志ろさりにむしの声　暁臺

鼻紙にねさへ行るいとゞかな　支朗

虫の音やもとのちるは清に明離き　峯江

枯ふしも日に学にむしの声　信夫 南楚

萩垣やわけ入れ須伐秋の友　艸也

小比丘尼のおく捨り出萩かな　暁臺

川縁づや流るゝ色の萩　麥圃

風さつと萩ふりかへて川ぞかな　白圖

風たへて乾もとまらぬ尾花かな　亜満

清やくしと月に與てる居る芙蓉かな　東壺

汗のまゝ絶えて消へし白芙蓉　麿之

啼ず虎の腮のかゝる月夜かな　东壺

こゝもとてや宇歟てて居る虎の妻　暁臺

秋風や虎追ふ翁しきの声　支朗

篠原や星のたゝえ火に虎の声　令章

暗かりに柱のひかる松にかな　亜満

鸛の巣たゝみつゝや松の蓍　暁臺

棒もる人のごと似たる松の蓍　峯江

青まろつ声遥なりけきの蓍　都貢

右三章を吟ぜらるゝはまさに無為化生かく

酔吟す画家仙演無戯てふ二亭の夢ま拙筆
三味線ふきぬ画某らん八声線添ふへしや少さ
彩と稀エリ精微れすつし出ん面さく玉扇ま
志ハりまたる声を無り志さ二幅と為次
意の詠

松山よ浪こえて人銭かくしく数
安まかりけ為
きりしに二つとふかさ枕ふ　圃暁

ぶつの杜若の夜ハと何まかくま
ここと
月ここまてて無ましやもと忍ふ為　騏六

名月ま海原の無する衣香ん　都貢
鶴鶴の驚まれちるく波中ふ　入素
世の中や其形山たつまふ湊り島　東紅
花つく露けし糸の霜等　册也
婦るひ迎むやうま藤なりふ四の戸　輪五
今桜の葉咲まなり市の中　東紀
忍ひをふけしへれとやなふの菊　塵三
曲られぬこそ離為ま菊の花　是誰
きくいつまさ志るさまん定つまぬ　支朗
菊咲けく扇よ捨る百ら果く為　午晁
遅ら糸

名ニ高ふ浪ても松そ持ちらん　都貢
松の心柚よりこそ思ひ夜かな　昨五
秋風や見ゆ菊は果ハ火の光　臺年
萍や雲染めうつりて秋ぞ　禮く
峯の松ゆかしをまた見る九月盡　有泉
小松とこそ出しくらきハ角力かな　蘭雅
稲妻や色も濃けり松の汐かな　石診
明日や松と桃花さかめけるぞ　朱蓄
郷向ふすゝまのうら萬葛楓　輪五
八朔や又見つゝ志き年の飯　白圖
松の葉や外様殺る豆のつる　風蓊

霧ふかし朝日の白に峯の松　羅城
名ニ水の淀を松とかけり秋の風　越推谷 蒼右
蜻蛉の羽裏ニ寒し秋時雨　白圖
松風や寝覚に聲く啼るの声　暁臺
秋の葉ちらし宮に涼や夏越一志かな　支朗
松明に燃てもゆくや裏紅葉　暁基
天津渡残る月とる鳥
年貢米残渡し瀬やや村紅葉　白圖
云の後残出で来る蕎麦の出江戸
秋大角残る秋
玉川ニ布抗さらし后の月　斗拙

菫津の海ひんと鳴くぬくとと

しほを志るりは友どち集めて

業平の表反魂の古墳有けり

業の煙よりまつりしと嘆世まで　琴宇

夷の霧や星の夜を附るらん　蝶六

反魂香墳

蝶の夢うらくやうや風の秋　里中

霧きえて又打くの跡影を追　鳥雪

山陰の滝を葉のいのちかな　斗拙

出羽玉津田のしらべ

象潟や秋の鷹ゐる夢の雨　與乗於 回車

飯盛ちの久能山に

浮世や葉桐の名りは葉の色　支朗

富士川の流れは洲中の里あさく

降るまで杉ぐらせ〓すべも

高く船の上行方や〓し

船もやし揺るあつかむちらし縄　十久婦

蕉葉集巻之四

春之部

芳の戸や立出てさらに松の内　支朗

蓬莱や世八繕かけて浅路家　菊居

万歳の来ぶりやとく追る椴この春　竹也

門も松に無ぬ日と明はなり　亜満

万楽を世のかゝみし老夜路　僧 牛晁

寸志く寿も足らりさの春　楚菊

海苔へ出て磯をとれつ初日かな　李红

元日は誰か思ふくも青く霞かな　都貢

稼神の中まとまもし日の初め　暁臺

梅　人日

剛うまくみ我まみへし梅の花　李红

咲日折りけるく日あまて梅の花　呑濱

むめうや嘆りる園の人のやうかる　万岱

芦垣や梅の咲くかりの露の葉　白圖

梅咲く河春きも日影流れくなり　斗拙

谷村に帯をひとり折り梅の花　都貢

此の世を雪ねく頬白の海日かな　葉月

梅咲くて十日に見てぬ月夜かな　暁臺

上流の粘の芽あわさよ萎りつ　輪五

芹萎うく春庭木の擦も春　都貢

鶯の子くゝや守の男の世話　慶之

うぐひすの声鐘追るも自然　羅城

黄鶲の清らに見る本末この春　李江

谷寒は藪うぐひすの名なとし　支朗

うくひすや縫綿の新しさ　狙乃

鶯の帯とく世ぬもつ吉ゝ那　越出雲崎 玉枝

鶯啼やよそへとしるす寺ゝ名　菊居

うくひすやきつとみかへる叢籠　白畾

うくひすもや関の出口の鳴初め　月壺

書鶯て中切川をとり来　曉臺

一里見えてくもりや梅ちる柳　残長

青柳や裏をみせてもあたらしき　都貢

濱鑑の埃つまやすゝん曉柳　亜満

たまさかに柳みえてき夕紅　羅城

青柳の影ふさむや蹟つま魚　百桑

ちる風や柏つ木を吹ゆるし　謝大

はるの夜やはちらし浪より水の上　宰馬

春風に小倉堤を縫ふ那　東壺

鶏の尾にまかれちまでて春の風　曉臺

蛙鈴に蝶の針ちる縁　紫紅

婦くして縫うて繡帷めきたる花の山　亜滿

ちぎり絵の影に鶏や花見幕　曉臺

きのふやけふ咲しやと花も笑ね泉　文州

須テの片所梯揺折屏風に

落さして花ん影あり女房かな　白圖

散果や菊落にまぎれて花　牛泉

春もやし掩て居らるゝ遅桜　一黛

雨の底けぶるゆふくれや桃の花　都貢

川縁や芥のうく数木庭の花　牛毫

ゆふ海を目の前とみる霞かな　以南

宅もうらぬ花の続や村の月　佛也

縦線太く村まゆふくまに海月かな　靄年

打わる春や名もしなかき夜の音　都貢

白魚や友うらまちり立もむ朝朗　入畫

若鮎や浮る水のけしきさえ　半江

蝶飛ふ(?)わかせくへに人の杯ひろひ　岡崎 趙息

草さうまで花をしぬきなり草の蝶　帛莉

蝶飛く風なき日とも色そへさかり　暁臺

東に萌に尖る垂れさしのゝすゝめ　半江

雛子の声蛇さそふ絲切る勢ひかな　白圖

築山に雲のたえゆや雉子の声　奥 稲島 三保

不言出落

紬飛や絲線端中まて立重し　暁臺

春雨や物に倦く目の夕眺　支朗

志ら雲のうつるに菜の花の盛かな　五園

菜の花に出代人のうたふ哉　槐立

菜の花の乾ける戸線流るく蜀葵かな
能りし縁　暁臺

小涌道すがら

蚕の子此牛に婦手執く手驩ぞ　以南

きし啼や二人ゟ見ぬ小松原　桂五

春雨や三川四つ二つ雲の中
　木曽路はれて武蔵へかゝる　素紅

宮手段送りきし

春きて生きつる唐坂の遠桜　暁臺

河辺や小舟ゟ乗る啼雲雀　都貢

ちまたに水をうつ桜の鳥　羅城

西の日宮古の山をゆるとて

宮つの山一日春をわすれけり　暁臺

枯芝の春ふきたゝくすれの雨　支朗

春雨に濡る幾の古葉の鳥　無三

世しらぬ戸に籠のうゝや春の雨　白圖

一家に流れくもしすれの雨　都貢

春雨や岩の手擦し谷の音　為雪

西吹くに落つく春のところ　史川

五十番句合

左

春雨や簑の乖りよしの川　卧央

右

春雨や柳ゟ桑柳し出花菜園海　圃暁

うらつまつく汐干残捨ふ春日哉　暁臺
陽炎のもり留てたる松の哉　都貢
春の暮や方燈によするたり蝶　輪五
ちる花おちまとや都せやましと東人　寸馬
春ミ雨や雨香日人と近く春外　都貢
高の尾綫結ひ上てる雲の香哉　暁臺
柳髑髏の切口にすさまさ哉　等先
陽炎や標（ゴホウジイ）わり干汐拵えて哉　待兌
飲酒うく砕くまゐたり春の山　都貢
乞網すまての雨綫ふるふ菜摘哉　入素
陽炎や午濱にうつて鰹の足　杉六

柿りを沸しき庵のひたかな　匆古
塩烏賊にふりちや蓄の春　支朗
糸綫出く春のゆきゝや古着買　万岱
曲く春や蝶く飛る渕の上　鹿鳴
花見る日人も足して春墓哉　是誰
蛙子に尾の飛き春と越より　白圖

谿聲

輦に寸寝まやせ家のまゝ哉　暁臺

蹈菜の園中に蒼鶉っ樹移
志植し綫壽もこしゃ徳哉

よるしくに鶉や撲うん春の色　支朗

春ふかく柳に庭の砂とらん　都貢

枯の日

芭蕉翁の七部の集とて世にひろむれか中に冬の日の集ハ尾張五哥仙とていふなりけり爰に蕉翁菴の門人其角か撰る冬の日をつたへとく先哥の竜の歌仙ハ是ハ継書佛葉新の何よし蕉翁をす稀なて其日より爰まて新すし云ふ庭純花の芳ゝ葉し たるすミに遊せ新也以つまの集に出されしとを見えて旧まハ蕉翁菴暁甚墨氏是識焉

これをたのしみて杜甫が詩のたのしみは
四書の歌仙法に孫無比尾張の五
歌仙挑んとは稀なりし閑居るに
語りも稍の尾張にくの衆徒なりと
いふべきさ組みの説とし踊り来る
ともし青眼なしく賞し給ひさん
いつの人かしといふ人へりは宗に本
州の歯軽すといふ人へし浄宮
に除かへる事に経を抄へしすいせ
誌もなく嗜手つゝ清く慕ふの
其筆一也一たんも只此嘆にとかや

としハ明和の五とせのき読説房に
集るはをいひに象にふ名残自のみし
かき筆法志ぬりしまりいさし加
黄綾姫きゝ筆一志かき

張州老隠也有選

貞享五戊辰七月廿日　於竹葉軒長虹興行

粟稗にとほしくもなし草の庵　芭蕉

藪の中より見ゆる青柿　長虹

秋の雨歩行精に出れ暮かけて　荷兮

月なき祖銭ゆすられし山いかし　一井

ころもしと人のいひふるちよ　越人

草葉をもちよりて屋根葺にき　胡及

木の葉ちれ桜の末も神無月　鼠弾

清ら結うぬる鴛のつひ摘　蕉

遊ぶさく蚊の鳴声に睡られず　虹

わきは物ふや妾かれところへ　兮
水つけきて立たる髪の汚しく　井
死ぐ君を東き玉すつる露り　人
石龕をひらきも出る夜の月　及
蓑笠かむしく露ぬかくす雪　彈
大姑ほましく悔る枝の穴何を　蕉
白兄たりきの果面る興ふき　井
菊乞まもすもく花のうる枯して　兮
歩みひそ面経水の連翹　虹
日和さそはぬ気ひのおしく　兮
本島寺ろまきの勢まやり　及

色恵こさや給つまけさかしとかり　彈
切龕たるもりけすこさ夕き蜂　井
さるくの香りかり宿月の新　人
人一代の立銭とふ何きさ　蕉
捨し笑き子すのうらき門むつ　虹
きたれ石あまもとうかを洗れ　人
懐に眼指さ志てやまた出まれ　及
下戸銭ふくめれ客の花の亭　兮
其咲のむめ代ワり身またとくり　蕉
嫁せぬむすめの眉かつて ねる　彈
志持は寄にすかし北ありの垣の奥　及

ふくきや流せる松のともし火　人
明やすき夜をまもりかね腰かけて　兮
なつは残暑のもりやくきれにけり　蕉
花のよふ秋の…みる物うさぞ　彈
篝もて出れば…の夕くれ　虹

芭蕉六　越人五
長虹五　胡及五
荷兮六　鼠彈五
一井四

明和五戊子九月山荘に宿して
蕭老て妻なしと嘆きあれ　支朗
月や白くむらこやく紫　曉臺
花木槿ひと輪をつんで　斗拙
烏帽子ほとゝぎす人に律ふ　万岱
曲物の老漁翁の糟漬部なりし　亞滿
小なる小庵きぬ粉ふれ　他郎
胸合ぬ袖なとし蚕かためて　臺
母の面はりの雛一筋　朗
年寄と笑ぬ廣き吉野方　岱
月裏ハ杉の雲とくし　拙

皮剥の出る縁尖に淋しき　杉六

盆過ぬ内はや魂かへりてとん　五周

蔦海を走りて来る月の宵嵐　郎

刈穂も濡らし　縄を譲　除ゞ　満

小商城ゆるゝく三絃弾せける　朗

扇をとつて是まハあさつ絃　岱

ふれの里と瑞籬の何花静　周

根葉かつきに卵割の雛子　六

茶風に杉のく履出る　柱　壷　拙

嫁入りとて薬はかゝきまゐる　郎

演篇て闇に粧ふ大のへ息　満

鶏孫のあらしと氷やハす　乾　朗

蜻けりに初く捨たる海豚の西ゝ　岱

前雪居仲　浦に窮屈ハ東し　周

松の末とめて旅羽をみせまゐり　六

鷲の業なりれゆふ　浮　拙

我先さと桶提て出る網子女ども　郎

佛ひろふて名残　定めつ縁　満

今宵又若郷に来て月冴し　朗

声ヶ枯もせしの哀に死ぬへく　岱

後妻あ残うても心の責まるゝや　周

本情の里ハ山に備　窶　六

初包ます八塩鋼のさはけ也　満
茶菓出て羽織着て来る　臺
春毎に無佳國師の異風　拙
柄杪有らく砂川の水　郎

支朗　五　亜満　五
暁臺　三　他郎　五
斗拙　五　杉六　四
萬佐　五　五周　四

秋八月甚六亭ニ興行

縮幕より籬見れ別涂り家　寸馬
月夜の門れ杉葉たち稀れ　騏六
秋ふかく大佛茶ま霧さへ帝　琴宇
鳥の羽白くも落くを拾ふたも　暁臺
肌つきを着け山猿の華襷　東壺
南の風ならで吹ぬしろや　帆路
松魚干れ尾鷲の里れ噂しけり　六
猫や来き紀れ杉をかり出しり　馬
今わうれ非興のまへ猿因寿　臺
雲たへやし又村菊や萎む世　宇

閨の月寐みだれ髪に太刀佩て　路
芙蓉の花残りそひあれ　壺
さらさらと水際傳ふ秋の声　馬
何色も有し後ハ閨さへなし　六
何某を尋て讀し五六代　宇
一揆ニ志るく伊達の感状　臺
蔦星りに由つたりと罌粟の花　壺
肉外の妻に勢ふ沽杖引　路
涙の夜ぬれむ袂に浸つまんとる　六
尻目よりけく粗志よろつく　馬
とくとくと茵の朝服の諦きし　臺

舩の上にまつ白粥の沸た　宇
毛を出く唐僧に梅我ハ写　路
冬扇さし綠我も緑し　壺
須臾の天ヲ美しく室に入る　馬
厠の燈し木の葉濡まさる　六
盆山の何ほかりしらて望むや　宇
梅干喰ふて解し薬の蘇ひ　臺
夕影に月の夕影糖きかし　壺
藺の匂ひの川盡れにる　路
乳腫搦かゝへて因果泣て居る　六
莨我ちんるちゝ下知のやさし紀　馬

漆絃子の外面遥よ三線楼て　臺
見ぬ櫻菊ハうつ〳〵秋　宇
ちゝくとうふぬよ延る絹の糸　路
目ふかけるふの清ぬて眩（マシロ）く　壷

寸馬　六　暁臺　六
騏六　六　東壷　六
琴宇　六　帆路　六

九月十二日於暁臺興行

今歳白河のまゝ文ますんむすび菜　白圖
月影菊しそ天ら低きくちを　都貢
秋の水冷しき鯉挖（タキ）出す　暁臺
たくさ縁しと赤き眼の井　宰馬
石の出線於楼北雨る嚔よ　子東
枯篠清りき萌志そく峰　是誰
無帰よ猿皮鞣わきさそさ　貢
終以ちさせし鐘の総ふ於　圖
唐士の稗蔓（ハヒコ）まて於そを菜時　馬
醲（スミ）さ濾の小黄なし先ん〳〵　臺

くろきにも舊き由緒の泣せける　誰
佛にれさ中れ雪の木かくれ　東
寂々として名取川也の冬の月　圖
わか新たけに夜さむうけ　貢
壺の金ちりつちりつと拂く出也　基
養うそくと書きさし人そ忽　馬
時雨かゝる雷にせし花の上　东
埋木も浮け雪気の水　逢
蛙去をことしも二羽おとれ　貢
盲の親の粉粧ましふ新　圖
せんせんもちへる思並、藤の殿　与

蓬沸る菜の花のつゝしう鳴　基
ひとやうる古文残よむ宇佐の宮　北
きをわすきく人はなさん白綾　东
宮振すみゝ家うかゝる訪もなし　呂
水うましき陸奥の夏　貢
岩角に柱杖の後よ味わうん　基
心の一字残書くたれ今れ　与
頭巾のとそうにすゝく月出る　东
ゆうし檜笠家の分やまう　北
眺めつ築すまふ栽亡き人々　貢
来つきつまふ喰らく離るまとく　呂

足利の聖の堂に向ふ漏る　る
嚢に持し　尤硯出して　基
夏すゞしく主押花に志く番残構を　淮
ましさすたまの風ぞよしとや　朱

白圖　六　宰馬　六
都貢　六　子東　六
曉臺　六　是誰　六

初秋十字盧月以海興　曉臺
蛇のきゑ無し簾のみなまぬ　卧央
裾く乱ふん艱芝摺紬露　羅城
そゆのまことより涼のすゝむらん　桂五
留たる燕のふつとあるき　里
氏の一字古く傳へし刀かぢ　雲
此をと懇意に醸ふく程ハみ　鹿之
畫残ミせく月白の猿の然なれ　央
明るき細見に節　かろせき　基
菽のころを居しく萎に君偲ん　五
胸痛くいとちうらなのぬま　城

格子の梅前をし庭島　之
月に對して古寺はうれ　央
たく一縁なる花ちるに逢さゝる　基
小枝たをめて青柳嘴ム　棄
別荘も萬都しく古は明暮ゝ　楳
春雪なる我よせ家妻の江　五
東風に初音の神のまた縁くれ　棄
楼さりしこさ益人の注中に　之
憂きをなりに交情を初て二千里　央
元の家並に思へ引て大子　基
吹たてゝ五とて月の夕影　五

被戒の縁の喩すゝし背　城
て度ハ弘徽殿へも互きしく　三
宮ハ御月を梨子の花ちらし　棄
称へしし甲州割銭買うくり　基
一日かちわさふくひよ家に　央
紀摩の扉ひつしと鶴ゟ這ふ　楳
橋ともアんんの橋杜しを　五
声窓をそ神うた風ふ月の本　棄
氣路のな嫋の縁をひらへく　三
名取川杜子ちく瀬見川瀬川　央
ゞきうえ志なる皆男を慰つく　基

あけからす跋

抑そ俳諧を常に見ぬもろこしのよしみに
換ひ雪中に狢の裘しく姑射の手秋の雪に嘯
くともれたまうよりて其の定義あらし其変に
至る流しく文字の妙ありにあらんや侍声達
孤ともに四時の変化に趣ふ其のはるふ人也
居むうち尾濃に遊の徳生蕉翁指揮し
出いるハ奥羽に跟を剛むとけぬハ之に
書き俳の道に布くをすし人事の変化
かくのことし其自ハ俵素の大淀ハ
前後二書今そ之を暁師以くる業務

白銀線すゝし綴ひ錦ありけり　五
雛の尾に文字ある帰る　桑
雁笛て落葉の線根越ゆくそ　三
聯気なる柳垜すとり居る　素

暁臺 六　桂五 六
卧央 六　一桑 六
羅城 六　磨三 六

安永元年臘月發行

さきに八網之の一扇ともなりて続き出し続集と
共に経に銭路の本となりし八重八ちかく続くる
頼に千橋の香銭かく銭の長演あかりしかん
も枯八泪る山と都里の一般の神銭ありてさき月
の玉江の機にすすみけるや宵論んさたりけり
たつ里ともすえの不及人の気変又加ふの如し
とくむ人りし浪いそにせん道の継承る銭つせ知のく
う志経影銭たち遷ひ出つゝ前年そ墨経銭
蓬山の雲にまたひく惟懐かしとその暁に
沢八三月十八日本井ける

明和七年庚寅　三陌園主　竹也

武江

ちる露の節のむかし哉すゝき
尾の鳴蓋子の奥羽行八束
湯派のくしめあるへし

手経りしそくふ網唐そかんさる　大無坊 秋瓜
風ちりう我う権のちるちる　暁臺
帳入に裸の花をつゝ海せさる　琴堂
門ちるれよふいうひ花やし　竹尓
いかしに雲の月の月の窓　童牛
蓬るしく雪の老る塩り海　之禾

左遷の身に出来縁の志ら絹付　素綾
奥羽をめくり小町にやうち晴
春雨や旧交わすれぬ茶に麻
我坊も今年は渋茶一碗に名残を
打して
卯の花は谷を飛立そ雪かな　世味彦　竹外
谷の山ここかしこに露　竟蕘
ふり返る梅影清き隣を渡りて　童牛
のびよくと蝶飛引や　秋水
川舟に棹さす谷の月の夢　琴堂
諸た鏡にうつる那庵丁　三禾

送翁
夜半は我たのしや旅すがら　童牛
引くる越路に清きせ汗拭ひ　琴堂
まだ八風のうほまや捨ての浦　三禾
まつさきへ達や笠さし夜の初め　素綾
あさくの若葉や橋て志の姿　麦遂
う桃花の香に身触し夜川　魯舟
菜さらうの上や漕ぐん旅に船　先梅
蓬莱の眺甚風子志もしく
武江に秋をとどめすみ川　斎の
雲に行き象潟の合歓みて

下りしく程海へ八幡より　雪中庵蓼太
と云ひふるきのりく
帰るやようえく出る夜哉　暁台
蕣の花は飯またもく　吐月
二銚子女なほ男湯の酌とりて　眠翁
此次料理と鉦の呼つき　雷堂
月出うせく須賀明屋敷　山李
きのとう蕣は聯のいたつく　連夫
勤化千は虚無僧寺の孫むろ　文来
被ひそうるかるてはんらん　夜梧
料きなぬきて稽古のきれかけ

出かさ迄て松の朔日　阿人
被柳名残
笠はさる花残丹日ほんほ
風流の回標残りけく旅宿
月をさ戎き雷と卯木の花の時
加川や旅ほ日数は麦の秋
家残して鳴海渡も文字摺
先すほく海さきろ禱の今年行
かつらんとうつきほは残竹枕
料はさめ合歓は宿へとや芽稲
ぬくの弥しるり松岳周人
河人
晏梅
文来
志毛
山幸
雷堂
眠翁
吐月

いたる曉臺子に贈らるゝ

華やかになく見えぬも世の枕の良ゝ

白川の麦は秋風と見えめよ　金洞

作田屋　小知

留別

意を起きて送られし風子訓へき

ことはり我江のやさしさに離れ遠き

かけく

何ちとせの書残す我る夜となれぬ

武蔵鴻巣

尾張の草の夏雨の果なりて

奥羽の志れるよしかゝく吉野道　曉臺

なる海くやつりきみ江湖の中庭より

むらくさふらく旅笈我孫子め武蔵の

風雅に遊びて明くる年月の未だうけ

なゝし布袋庵に至り七とせの

再会我待く役轄の横をもすゝ

巣我かえてさがる志ハ都しか

詩せし花をこそ流しとゝまり

る梢に夜すりハ西我いつてさて

ちくふとも声こと所癖や

月くまかる月かなし月よ宵

暁く涌る江鞋の出来

布袋庵　柳几

曉臺

兎陵

篁雨

帷山

民石

門弟残菊句毎ニ一人づゝ合

形留ても散らさぬ菊の髪　　喜年

ぬれ桜に縫箔匂ふ風呂のうち　　其茴

蝶とまりつゝも清餅とかをりつ　　東甫

世の中に花人を来て立ちとらん海く　　藍二

郷もかつらに散て流濯　　翠光

鳶さく藤もせゝく通ふ月のそら　　冬死

かすみに律残す香れ駒留　　味家

一門は稲の杜に杉らのさかき　　嘉桂

嘉古しきゝ仕舞ふ女原　　杉夕

嵐さつて業山櫻らすくなりけり　　蟻中

　　雅笠

思ひ〳〵絲たる雛子の暁　　高門

江戸見物

かまくら花声やつらけく弟説

文うまし江戸の藤見る初松魚　　蟻嘉

風の砂石残飛をし電光

眼に入る坊中の終

鳴神や身の上をのこ杉のかゝき

奥の風流わりひやりつく

数十歩見返て出る弟

諷の声相撲句の出世や出る時　　将几

右紅葉園日光

祢祇なき納

ふもとを見まさ関に寫形を森々の下
思ひうふ山
わけ入るにハ桜に衣し麦の香
百年萬歳滝
面白かりし雲に出ても滝かな
形せ見えなくて
茂りても横に照るる藪の底まゐらる
数年を
往年山寺まさ石ハ古寺に
捨ても行ける形の様とまぐれる

毒気打うせバ蟷蛉のむすび見えに
こゝちのたちまち死す
露ならで何に入ひ入ル絡緯の声
陸奥の川　依美郎 後高
としころ行の見りきし翼の声
面すもまさ見へしとハ云ぬ空
友に行しむ人の絶せしまで
何とハ為くちらさ何まし故人
哀残漢く離残正にときくし一
嚢を擲みし荊蕀残すとひと
抱残さくむ孤負のり御て

扇一本に威儀をとゝのへ鄰く
しゝくやうゑ　暁臺
金川銭湯に扇の切目さしん　呑溟
香にゑるゝへれ袖の橋　吐虹
新法師のひらりハ琴に縦ゐく　二流
淵金津くさのゑもかゝりゐふ　菊雅
九三表乳つよう添ゝ南の月
子猫と喚ん猫の畜の登莚居　東壁
信夫山
田面の水さ四境残をまて　同所
て住菩湖上の時以年目のゐさ

子残けしまで雲間より出逢
たゝるゝゑゆをし　暁臺
水際し境の中の志賀ふ山　綾く
義残無女藤に田ゟへ芽所　文保
桃花奴学と反挽の老のまて　齊泉
又擢中のす羽帚のなとと　一黛
月備の蔔鋒紋に胡の月　易古
〻世ん木くくと叙舟の尾砂
文字摺　伊達郡　東林
其のふ文字に摺ハ徒年墨ゑしと
横切くゐふゑ年ニ川残後ゑ

雑餉や人影くるゝ秋の懐
石のおりくに中まもつ紋
まで行くも四支の寄せるなり　しそ
文字摺やうらまんの友つ衣　曦蓋
笠蘂さ海に露の山陰　田車
姥出するるよ名残の灸すゑて　豆苗
ませりも組くされ困縁　尉件
揚簀戸よ月さし入てし紫羅　卜而
ちょとひ小鳥鷺東に飛ふ　十虎
葛松原
業田郡太河原

覚英の庵ハ山陰よむすひけり
たゝもと見えて寂よ松その践
とよせるより西上人ヶ洞うもし
基そ年もの記名よ派ら上
もなりける残畔人の斧よ寺
偲しくも松原ちのとせあて
そのかぬみそらけのに黒ヒさよ
獺せん猿廉古つて涼樹濱花
霞ふ清宗支よ塵ちる残出そう
営の都のいかゞ端や松原寺
影浅うちまよ葛のうちさ
曦蓋
芦中

まゝ子にも又つりかねと水の暑く　梅笑
袷の袖すそたゝぬ緩く限　や蓼
曲らへし月ゆらら敷の紅たゝこ　加生
垣下の者とハ択りしるの喜　女 柳風
伊達堀戸　福島
山茶屋ひ洞を挑くの綾萩丈
よ欲ものなき地方伏虎の隠
煙庭わつくよ夕陽残ひらくに
高残とくめくうしら結めとりひ
さゝたまもの山元としても伊達の喜
ちゝ手に浅らくなる田ちる
蟻臺
葉附

志らうハ絲あとく綿の縷らえて　楚江
氷の也浪るを綾安つちとめる　冬芝
治く浪の堀まかく栽月の千絲　蕉雪
柚味噌つく満間ざ昂媄　左濱
武隈舎　名取郡 岩沼
松和に古きとしとなきまもらひ
つたしく岩みを折りひとと庵
志まなたりた綠蔘鮮二辞りて豆
わらまし三月角なしや　以ら事
一本とくえ以てへともなかりれ
松うち深や花ちまのうまて下綠え　鱗甚

麻もの廿く寸るを流して置　休粋
ゆかしさ世の中は源氏の初より　呂水
烏の番乃雲わかるゝなり　素粧
寿かゝら集めし身は畠も　盛之
郷しれ三里過ければもひろく　萬文

道織殿　同　増田
これ絆また郎し来まかれわきよそ
色かゝる推成かゝしゆかせよあ
せきかけて魚捨るハ女人の身は
端ふ縁よし成就をまつやまを
故郷よ身誰かまに非し穀の漂

深雅成見殺ちかたぬハさ深きかひの
中せを
睦臺
夏草栽被ひく熱ん振まうち　林之
掛まかうれ多雅の笠縁　生来
高人の子かよ紀夜成差かりて　荘来
織巻ゆりしたゆゑかいゆうし　全来
雪の冨成月を行く行ゆかひ　九江
鮭かのりまいま屋様ハ太縄

寅方墳　仝
芳擡塚なる墓筵の着いなさて
松へまいゆや志き農家の嘴を出り

佛の前に百歩あり蓮の香高く
若中将の古讀経隔て花と咲く
一時とも経るは嬉しく罷まく
又寂ある純人を期の靴によ
まつりとや我をうつくの境まても
出し雲井に於て経をつく我経
色つうしう心よくまへ切ッよ
手靴の為になき何しうかれ流く
塚らくよう方くし経け経果や世
以てよ婦り切 佛の五月政
織原の職に経いをとえ之絵よ

曉麓
葉山
完似

気まことに花あり年毎すれば　智風
杉ととて船をいわふ菅の月　葉栄
素方有の機経日本みを姑蕉　車友
仙台衆人多食居経中
自幸之日経忘世謝く仙岩よ
入ろく草難経とけいやうく人の
絵法おる第居経きつるはま之
らまくくたらしめく梅の碑たる
人絶をそせく親達や據よ藤ふ
とい又親張色杉の乱きくるまく
連鳥の絵きくよ般り就一日

郊外へいてさびしきなるに田世
千里一眺に渡くしすて帰る
老鶯耳泉の地ゆ勇て
這わする雲も見へきまた田ろ家　曉臺
人影も無き里の日詰りるを　丈芝
兎生縁ヶ千きゆき波打の鐘鳴く　东舘
円も見ん迄ひろけしとやうたうつゝ　葉文
霊唄よう老乃髪引く小窓ね　兎耳
老男を波ろと海をも老男ろと　鐸子
文蝶建　同主
さ淡ふろれきうさとやせ小の下ハ

菊こひるゝに尽すまさと下ニ移ふ
の花葉もく里瓜の花紅の色映れさ
うひて嗅く交まいとと好ろの蔵を
秋をゝ楚よゝくもやゝ寂し
文蝶於ろ市を殿き風に夜の雲　曉臺
ゝうさしとやしせかさし扇後　菊央
ゝ帝以とろし雲ふをの世ろ柳子さ　菁水
月よしゝもひの宿を文よし　老耕
男廉鳴古の山中のうし鏡篭　一芳
楢の兵をふ戸ゝ飛き雪鳩　东埜
渡しじゝ見

花のころ乃や菜ハさくらくの色
えくらきく一株の老梅奔舞
極兵の地とあそりなるひと自
若き人にまかせて是も流るわ
書樹ま花つさ杯蓄るて来蔓
蔵もさきかり鄕所と衰ぬらし
後の今残れる文字のむかしを
おりふし顕ひたらしへし
風かなる昼やむかし枝と冬の
髪すくし夜残りそく蛸　筑翁
九年目ともまた月の何ぬ夜縁して　金る
古幸

何となくこのあれ草子むかしてある　松寮
きらくと月の猿残畫の実　東嗣
夜ハ冬のまゝ無念のゝけもの　接元
世も老宮山　是非居
まりま仙扇の文路残流あハ引露ハ
南く蟻のこしく櫻下のさやとよ葉る
つしわりふたハ孔山尖く縁年へ寺
法海残楼世わ
山つ方風ことしまや十万家　騰蓋
憾も花とちらしは喚鐃　芳角
塗実まを眺ゝ卿ハつふやきて　芳彦

棧の責くもつるゝか遣る　松蘿

月さしたもや枕にさそふ浅破　兎夕

咲ちらふ夢妻に沢の名波　蘭来

壺碑　其宮ハ唐

銘曰去蝦夷國界一百廿里今の
界ヲ算ふるに一千余里や日本紀
兼行帯の頭に日さる見玉の夷賊
征伐なと奏ス日高見ハ今何玉桃生郡
やしく太田の庄に日高見明神
猶座すすなる時蝦夷に属すとぞ
一百廿里去蝦夷や後波細標

行ゝ渓君か綫や西戎奴と呼ひ小狄
貢す郡中未年残遇く風雅に綏
ふるくやすし見ぬ隈くに杖残
なかし歌の蒼霞の跡あらさる
ふとやすひ出つゝ宿に至る一家
碑文に思慕をなりへハ旅墨を挽
猿残感し浅たゝ胸残せぬさく
眼定るうこそし宝變の衰
未羈旅のうへしるへしや
碑やたつ残去つく芟忌日　驍基

為り乾思の枠蔵すたり　梵司

琢々と吹矢の獲笑ハれけり　菜靜

うし哀なき傍岸の中　女 ゑく

つる投戸移しめやうに西の月　冲月

楢の廣葉のひつくりと鳴る　杏葉

十符菅　直菴

長柄の橋屑井手の蛙懐にせし
例しをまなふから吏我摘足我
とうとくつとよ坂さセよとしへる
老法師の筆打ひ出くつゝと
此しる笠にそはさむ十布の緑
をかゆるとの哉

笠よ有次第とのやもとらふ　蟻臺

蟬にさそはれ呈の松り採　布朴

八反帆西吹や針に縫ひけて　布珀

下戸からも先へ出えでや　文木

う流すりと月に手なる菊の採　和文

志はし車に海さりの恥ふ　壺洲

末の松山　素宜庵

祖翁以へ来よ是の松山寺と
其ろ名の松の蔭に墓我葉く
羽我かくし枝を添へ婦ら髪り
のまを施りゆふ皆かくのかゝく一の

明しと

遠持や末ハ無声のきりも松虫　蟻臺

露ちると神伐走ゆるすゝし風　陶叡

一つ二つ鶉鳴しける太刀佩く　夜雲

時分を流さるの湯漬返し　古反

背戸ハ先よ月をとうつろふさま萩　葛反

あちこちも稲のもときさそふ　古松

出川　山意唐

昔燕よ回伐集し此向の里よ喘さ

老く田学と狂男よ玉泊をと云ひ

そとも知るよたく此ならゝらそ

玉川とや待ともきて川ハ陽とある　蟻臺

ありの松橋文とたへ

六月や白よらぬ川ふとふくも　紀昂

汐風翻してかかる夕さ急　松超

俗くとたのしさ長さ夕焚よ　維葉

目見えの時ハなき云別くを　可意

腔音よぬすし桂の花の夜　桜虞

寂させたまふ明神の秋

里塚　武門

里塚や螳螂の人新造の里紀　蟻臺

篇の檀よ切とらしきうち　露角

汲くと釜の京おと浪よせく　寄羊

鶏に九損の友やさらなり　寄濯

川きつる月のわたりの志ら雲　女 寄萩

萩の露ハ枕を見かけ哉　寄珠

安積　月を

ゐまくと露を又結よ　ものなし

おきまてハしるく一面花もちかえる字　暁臺

この法もかし鳴のうきさ業深き　寄篠錦

夕月よ渡たるの枚きる来なる　寄英

砧綫側よ男ささまし哉し　寄滴

蓋とぢく箸よ名たまはる萩も候　寄峰

断らきく風の俸も声白　寄蓀

千賀海松泊　塩竈郡

日に波たゝぬ一葉の奥ゆかせんと千賀の浦法ら浜よ漕出く船を横さ風よ顧まつハ起粉多く浪残のそく新樹新藤く浪志まく年静なり

杉ま葉穢像くつし瀬と石と　暁臺

塩竈のまへふよ笠をゆあかふ　魚行

酥さ飲んハ瓶の返てこうと見ゆく　鶴室

津蔵かうそハ毛とつくの　左亭

丈六の毛毫までも次目の照　釜儀

伴縁簾を捲ハ枯ま来て次　秀鞋

塩竈唄弁清示　同所

示しけふ汐ゟ宝と沖絃　嘯雲

むら汐ふ潮よ清き藻の花　雨石

うけすゝまと嫦娥の眉よ夜明て　丶

雲きりの扇すくもやゝまに　丶

斬ゐきて盤ゐしと蘇柳　丶

かさい桃の猫よ追まる　丶

遊富山大悲閣　同　高妹

松濤ハ巻らく冨山ハ蘇花やさし

とゝ示そしゑよむらふ

岳山や衣る衣よ見銕まてゝ表　嘯雲

一箇芸風源しう拭ふ蒋雲　東雲

梓唄よとゝまゝかゝる背代營て　百馬

往猪よ恵をとめきまたゝし　武山

盃の光りを思ふ露蘿ひとく　丈車

薫ふゝ薫る何うしの流　羽音

続绳橋　志田郡　古川

をちえの名所の中縁とも称ふ云

ひ縄えたる縄をはたゝかゝす

た鼓をうつあつまる鯉来鼓没せよ橋之
出ての奇人打のひ鼓よひる事か　ゝれ
曉盛

鐘鼓の鼓たえや通ふ夏なさえ
声さし談なめり浦る数あるら
春雨

新内の艶さしめよ鞋つけて
雲扇

商賣ハ先つきらひ鼓なり
葉室

一宿よふらくうしよ月の夜
桃屋

光の葉ち鼓の姫の松竹ひ
藻車

婦畫松
　　　　　　　　　　　　　　葉蘭
　　　　　　　　　　　　　　文堂
商玉舞仙よそゝなら鼓の女なり

艶なる事一双の玉珠鼓ともなふ其
つたへく婦あん新へ光せらなく
旧所みゝく寐まかつて婦まみまう
くまさ埋葬しく志ありの松鼓栽
由妹なるもの嗣く新へ光せのまゝ
実の暮りく亡婦の志ありし鼓たゝね
ともむ婦畫とと婦墓なり

捨子よ婦りと呼ばく　松一本
曉盛

新のつとよ回唄なりとも
浅江

隠元の花りう葉　鑵鼓いさく
芳江

大工さし出ひ待ちうけなり
麟趾

鐘ハすこし月に跪向の鶯ハ三郎　玉枝

芸ほまもも雲つむ秋に芦の穂　不貴

高館覧古　盤井郡山ノ目

命成義に随ひ英名成子孫の路
彼にとくむるものハ農夫の詩るの
わか皆に衆ゆかりせしこと是成仮
なりとせ次に一族也勇士逞兵義
をつくして一朝の雲烟となる
嗚呼死して恨らくハ因模に負

嘤くと鳥も啼たり夏木立　嘯臺

川ハ二瀬に哭かる涼風　桒林

西に御座白先まつて緑さえて　曲肱

狸類ぬともハ乞をかいして　萬山

非の草のし月をひそかに咽餘す　華之

ゆかりの清流に垣の縁草　里鮎

松島

五條なるハなかれ見すへくに賞に加り
嵩をそとむ新八浦岸に造りけ
て夜るのあかめ文ゆかりたかすり殺たち
並ふ島へ月にむかふまハ伊勢雨
のゆかりく人まつ友と深かりけれ
櫻嶺渺江の八九をとしして純

紀岳陽もかくまでかわらはと云つ
さかひときく宵の鷹とは知らず
なかに出ししらを添ふる何事の紀
志らぬ後よりへ朝あそふ声ね蕎麦
まさ清く行つましみかまり世
中たつちや我ハ見ぬけく夜の露　篤臺

北原

蝶すらや影しく重ぬ狭き袂　蒲生 試川
都して使す鴫や入江の汐さき　江戸 為勝
橋のうや蚊も秋末の葉して痩　、魚州

送別

引くさいふ籾潟て花の緑も　三州 岩崎 桟車
みな乗て船中まく居らて秋寂しさ　石州 乙魯
雪の夜や寫て我とも啼く鳥　武江行脚 天逢
松にも引く狐待ぬ
畠枝先ふ田へ降りて秋柳哉　、是哉
吹捨く物を縁る日を秋の風　下野 珠明
炭うる海のぬし行はとふ谷の音　、
木の下の雛ぞうまくは秋柳に　奥州香 秀
素とも柳とも木陰の寺も表を残す時　、
梅さくや見とれの中もとよし　日光 斧久

鋒のひとつにたはしや雛かな　、瓢左
竹側ハ新の雪やむかしの花　、素風
雉子啼や吾敵凉の声かな　珠明
まつ見えて志て真の椿の月夜哉　、雪秀
木枯や是つくりに退きし備ひとり
あらしふきや一日花のはく鷺の声　、生津 巨石
昔おもふ花さく里やこのんと宿
仙翁に昔日の氷貴びと珍らしくて　暁台
こし梅残り居しくハ菜ぬる夜の氷　仙台 奈親
雉子鳴くなしハの竟て日和哉
すゝしさや月の雲路ハ足とまり　蜀史

寒菊のつほみくやりしく子　紫丈
木枯の吹きまとれ河の冬の月　雛子
川舟の苫も翔くつま雲の風　素耕
春の夜の鳥のしらや夏の月　一芳
月秋や二度さく花も手あはせ　右幸
みのむしの鳴はハ菜に播果ん　兎耳
ふるさとは声女なりかやく　来鶴
日さかりハ百士の色かなし顔也　千歳
上手とし跡よまる程や田植笠　等水
腸腹の寒文さひし赤浅黄花　拾紅
紅梅やとりしむつぶ女房　大芝

、、
近よりも春に節はり雉子の声　知足
五位や鼻の高き人は袖まくり　松韶
かゝりかさに身代傾る雪解哉　文光
梅にちる小蝶の眉つ牡丹哉　佛蕉
、、
わつかなる水田に低く蛙の声　陶家
明くれて鐘に[illegible]ある月　里月
風も又谷の身嘆くいろの袖　古蓮
菜の花は浅水に引むかふ杜若　萬寿
白菊に動く[illegible]水の月夜哉　宗雲

朧月や水に柳のちらし書　女 白之
虫の音や[illegible]の想哉　古水
まつ虫や乗に遠さるの音　古芝
動しく桃の迹ふる千葉哉　菜静
[illegible]流の[illegible]朧の声　桂月
、、
出家をそむすたゝし秋かな　市朴
菊畑や[illegible]夜は月に[illegible]の音　擬雪
むさしのに雲も縦なるきらめき　金馬
、
[illegible]　万央

月出て花へ梅のちりしくさかり　汀砂
さしかゝる蛍ふくさや池ひとつ　、松雉
夕かせや隣へ抜けたる萱庇　千賀浦 丙石
稲妻の砕けて露に入りにけり　兇江 一歩
ひつまとたる盃の影や秋の暮　、千蓉
姉らしき線の下より夜の雛子　後鴬 吞溟
揺るゝ手や宵の雛川のすゝく鍋　葉雅
ぬれて集る猫の家さむや春の雨　吐虹
子猫の恋や二株に二株と八咲まし　二流

見るとその詰る志ほのけり纖月　南楚
宗き草や動かぬも又ひとつ花　徑く
満ちて水須ろき瓣あるを夜の梅　一黛
五雨やしはまぬ川の水流れ　六保
苅株の葉間より出て月日見れ　有泉
川猫やたしめくさき房の芒　勢古
鏡餅ゑしや嵐の古川氷柱　徧く
蝶掃や見えぬ世の中と芽生え　柴彩 田車
親鳥の羽風にほつれし浮巣かな　豆苗

混陵甚兄あきまで抱の身へ
部あんとも非ざれと級初に睦びし
ともに浮世に流水とかゝるの中より
錢用より志ゝく一盤に糧錢有ち
帳中に津もちつきて合せしと
やうやく雙色の言識へたゝく家に
書後の燈に錢ひきせり
広りなる日々と軒なりし　暁臺
〻蕉庵しるす

明和七年庚寅秋七月